



2022年(令和4年)
3月号(No. 922)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

個性と多様性に溢れる飛騨・美濃の山 『岐阜百秀山』を著わして	1
世界最高峰であるが故の「宿命」と「呪縛」	5
高尾の森づくりの会「20年の歩み」を出版	6
板橋「植村冒険館」が移転リニューアル	7
追悼 坂口三郎さんを偲ぶ	8
連載 ■ ご当地アルプス登山案内	
⑤長湊アルプス	9
⑥皆野アルプス	10
Climbing & Medicine	88
新入会員	12
東西南北	13
群馬のヤブ山⑤／山旅俳句	
活動報告	14
アルパインフォトクラブ	
図書紹介	15
図書受入報告	15
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

個性と多様性に溢れる飛騨・美濃の山 『岐阜百秀山』を著わして

東海支部 清水克宏

飛騨山脈の3000m峰から美濃高原や養老山地の里山まで、多様性に富み、個性溢れる山々を抱える岐阜県だが、山岳県としての認知度は意外に低い。飛騨・美濃の秀峰250山余りを抽出、5年の歳月を懸けて踏査し、『岐阜百秀山』として著わした清水克宏会員に、「森の国水の国」の山々の魅力を綴ってもらった。

「岐阜県の山」というと、どんなイメージをお持ちでしょうか。きっと「あまり具体的なイメージは湧かないなあ」という方も多いのでは、と思います。

岐阜県は森林率が81%と日本第2位で、日本の3000m峰21山のうち9山が位置する、日本有数の山岳県です。しかし、どうもPR下手で、たとえば「加賀の白山」、「木曽の御嶽山」の半分が岐阜県に

またがつていることは、あまり知られていません。長野県や山梨県などに比べ首都圏から遠いことに加え、県南端の濃尾平野に人口が集中するため、山岳地帯と日常生活の関わりが少なく、県民の山への関心が薄いことも、認知度を低くしている一因かと思えます。岐阜県の山を総合的に紹介した本も長らく出版されていません。私は岐阜県大垣市に生まれ育ち、



奥美濃の道のない山、不動山・脇谷を遡る

日本山岳会選定の「日本三百名山」をはじめ、国内外の数多くの山々を巡ってきました。このたび山への恩返しを込めて岐阜県山岳の約半数を踏査し、「佳き山」百山を選びすぐった『森の国水の国』

国 岐阜百秀山』(ナカニシヤ出版)を刊行しました。ここで、何かと日の当たらない岐阜県の山が、実は個性と多様性に溢れていることをご紹介します。

3000m峰から里山まで

本州中部に位置する岐阜県は、最高峰の奥穂高岳など3000mの高峰から濃尾平野の海拔0m地帯までの標高差があります。また、南北に150km、東西に120km以上の距離があり、夏が多雨な太平洋側の気候区、冬は豪雪に見舞われる日本海側の気候区、寒冷ながら降水量の少ない中央高地式の気候区にまたがります。そのため、気温、降水量、積雪量などに地域差が大きく、植生も様々です。また、文化的にも南北はかつて別の

国だった美濃・飛騨地方の違いがあり、東西は東・西日本の境界に当たります。そのため、山域によって同じ県とは思えないほど個性の違いが見られます。

まず長野・富山県境の飛騨山脈には、槍ヶ岳、穂高岳、乗鞍岳など名だたる高峰が連なり、飛騨地



白山山地・大日ヶ岳から見た白山連峰

方中央部には、飛騨高地の森林限界以下の寡黙な山巒がひしめきます。石川・福井県境の霊峰白山を主峰とする白山山地は、日本有数のブナ原生林をはじめ豊かな自然に包まれていきます。

火山活動の跡もすさまじい御嶽山から美濃地方に移ると、伊勢神宮の遷宮用材ともなるヒノキの原生林で知られる阿寺山地、同地方最高峰の恵那山を擁する本曾山脈、そして、滋賀・福井県境には「奥美濃」と岳人が呼ぶ伊吹山を主峰とする伊吹山地および能郷白山を主峰とする越美山地が、飛騨に劣らぬ雪深さ、山深さで横たわります。さらに、濃尾平野に接して、年中気軽に登れ、展望に恵まれた美濃高原や養老山地の里

山もあります。このような多様な性が岐阜県山岳の特徴とも言え、本県の山を巡れば、日本山岳の諸相をひと通り体験することができます（岐阜百秀山」位置図参照）。

ヤブこぎの果てに佳き山が

これら個性豊かな山々の中から「岐阜百秀山」を選ぶに当たっては、総数約450山に及ぶ県内の山から文献調査で250山



飛騨高地・漆山岳から飛騨山脈を遠望する

余りをリストアップし、「標高・山容・眺望・自然・人との関わり」という視点を設け、5年かけて踏査しました。

岐阜県は、長野県や山梨県のような中央高地式気候で雪が比較的小さく、登山道が完備された山域は限られます。特に北陸地方に接

する飛騨高地北部、白山山地、越美山地、伊吹山地にかけては、冬の日本の季節風の影響を直接受けて特別豪雪地帯に指定され、本州でも最も人口密度が低い地域に当たするため、「道なき山」が多いことが特徴になっています。道なき山がつまらない山かというと、全

くそんなことはなく、「日本三百名山」の野伏ヶ岳や猿ヶ馬場山、笈ヶ岳にも登山道はなく、むしろ手付かずの自然が残された、冒険的な体験のできる難峰として岳人の憧れとなっています。また、関西に接する奥美濃の山々は、関西岳人との関わりが深く、日本山岳会会長を務められた今西錦司先生が岐阜大学学長を承諾した理由として、「そこに山があるから、私は岐阜大学に行くのである」との言を残されたという逸話は有名です。

今回の調査リストにも道なき山が46山あり、無雪期は背を超すチシマザサをやぶこぎし、積雪期はワカンやアイゼンでの踏査となりました。期間限定・好天優先のため単独行も多く、生易しくはありませんでしたが、途中で「登山道さえないような手付かずの自然が残された、懐の深い山が多いことこそ岐阜県山岳の魅力の一つであり、個性なのでは」と意識し始めてからは、次第に道なき山に分け入ることに心ときめくようになっていきました。結果として「岐阜百秀山」には道なき山が16山含まれます。

なお、本書のタイトルを「岐阜百

名山」ではなく「岐阜百秀山」としたのは、「名山」というのは名高い山、すなわち評価の定まった山という意味合いになるけれども、本県には登山道もなく、広く知られていない山の中にも多くの「佳き山」があることを伝えたかったからです。また「森の国水の国」というサブタイトルを付けたのは、豪雪が育むブナなど落葉広葉樹林の森が本州中部では最も広大で、その森が生み出す水が清流となつて豊かに県全域を潤していることに、踏査で強く印象付けられたからです。

団塊の世代を中心にした名山ブームも一段落し、新型コロナ禍を経て、これからは若い世代を中心に「密」を避け、自分なりのアプローチで自然に親しむ登山スタイルがより広がっていきそうです。そのような志向の岳人に、中京圏や関西圏に接しながらも山深く雪深い岐阜県の山は、格好のフィールドを提供してくれることでしょう。

登山の文化的側面にも光を

さて、現在日本山岳会では山岳古道調査が本格化していますが、踏査でも多くの古道と出会いまし

た。そのうち霊峰白山には「禅定道」と呼ばれる長大な登拝路が越前、加賀、そして美濃から通じ、1000年以上の歴史を誇つています。とりわけ郡上市の長滝白山神社を起点に、登山の前線基地とも言える石徹白集落を経て白山に至る美濃禅定道は、かつての姿を最もよくとどめ、石徹白の大師堂に奥州藤原秀衡が寄進した虚空蔵菩薩像が伝わるなど、日本が世界に誇る山岳文化のシンボルとも言えるルートです。

また、山岳県だけに峠も実に多く、古代律令制の時代、都へ労役のため向かう飛驒匠が故郷を最後



白山美濃禅定道の歴史を物語る石徹白の大杉

に振り仰いだ位山峠、東山道最大の難所で「神の神坂」と恐れられた恵那山と富士見台の間の神坂峠、幕末、尊王攘夷派の天狗党八百余名が厳冬、越前に向け越えた蠅帽子峠などについても本書では触れています。

さらに、踏査においては「円空仏」で知られる江戸前期の山岳修行僧円空や、檜ヶ岳を開山した江戸後期の浄土宗の僧播隆の足跡に、まるで先回りされたようにあちこちで出会いました。円空は伊吹山や白山など霊場となっていた山ばかりでなく、乗鞍岳や笠ヶ岳など、当時は開かれていなかった山にも



円空や播隆が修行した越美山地・片知山の岩屋観音



図：「岐阜百秀山」位置図

登り、登山家としても卓越した存在だったのだと認識を新たにしました。

また、播隆は円空より150年余り後の人物ですが、修行を重ねるなかで先達として円空を意識するようになり、同じ岩屋で修行し、笠ヶ岳に登り、円空仏を笈に所持するなど、その影響を受けながら槍ヶ岳開山に至っています。本書では、岐阜県に色濃く残るふたりの足跡をコラムで紹介しています。

登山は、冒険的なスポーツとしての魅力に溢れていますが、特に自然との関わりが長く深い日本においては、文化としての側面も兼ね備えています。文化とは守り伝える努力がなくてはならず、文化たり得るものです。今後、人口減少社会に入ることが見込まれますが、『岐阜百秀山』が、わずかも「つなぐ」役割を果たせたらありがたいと思っています。

（大垣山岳協会常任理事）

編集者、新著を語る

世界最高峰であるが故の「宿命」と「呪縛」

神長幹雄

発端は、1970年のエベレスト登山隊への素朴な疑問からだった。なぜ同じ年に、日本山岳会隊と

スキー隊という2つの日本隊が挑むのか。世界でもわずか5隊24人しか登頂者がいなかった当時、2つの日本隊が競合して6ヶ国目の登頂に向かうとした理由とは――。初登頂から50年目の一昨年、改めて日本隊誕生の経緯に注目して執筆を依頼、その成立を振り返り返つてもらった原稿がきっかけとなった。「半世紀を経て考える」とい



エベレスト頂上付近まで続く登山者の列(写真提供=村口徳行)

う表題で『山岳』2020年(115号)に掲載された原稿だ。

一方で、私は記念事業委員会の委員のひとりとして、記念フォーラムに関わっていた。1年以上前から少しずつ準備を進めていたところ、20年1月、突然、コロナ禍に見舞われて記念フォーラムは延期となり、計画も滞ってしまった。

しかし、準備に少し時間が取れた分、内容の検討も進展した。特に写真で50年の歴史を振り返ろうという企画が具体化された。まず当時の写真を集めて俯瞰してみると、それぞれのエベレストの歴史が一本の糸となって、相互に関連しながら鮮明によりがえってきたのである。実際に記事の作成や依頼などで少なからず関心を持っていた私にとっては、不思議な感懐に捉われた。それぞれの登山は個別の出来事でありながら、エベレストを軸にして糸をたぐり寄せてみると、途端に歴史が饒舌に語り始めるのに驚かされた。

その経験を基にした書籍化の話



『日本人とエベレスト』書影

も一気に進んだ。過去の話も重要だが、ただ振り返るばかりでは現代的な意味が希薄になる。清掃登山、高齢者記録、公募登山隊とテリマに事欠くことはなかったが、栗城史多のエベレスト登山はどう評価すればよいのか。同列に論じられるのか、これまで同様、無視すべきか――。結論は本書の「栗城劇場の結末」をお読みいただくとして、超過密化する今後のエベレスト登山に関する終章まで、一冊にまとめたものが本書である。以前書かれた原稿には加筆・修正し、また新たに書き下ろした原稿も加えて448ページの大冊となった。大多数が本会員である5人による分担執筆である。

表題にもほんの少しこだわりのあった。『日本人のエベレスト』では、あまりに当たり前過ぎる。『日本人とエベレスト』と両者を併記することで、実は対等な関係を模

索し、現代的な意味合いを探ろうとした意図がある。

本書は、それぞれのエベレストにまつわる出来事を年代ごとに、そして登山隊のテーマごとに50年の歴史を俯瞰したものである。日本人初登頂、女性初登頂、三季初登頂、無酸素初登頂、バリエーション・ルートからの初登頂と、これだけ「初」が付く山はなからう。その根底に流れているのはパイオニアワークであり、アルピニズムの思潮であったはずだ。未知への憧憬、高さへの憧れ、そして困難さへの超克、そのどれもがパイオニアワークであり、アルピニズムへの志向であったに違いない。

しかし、この50年でエベレスト登山は大きく変貌してしまった。唯一の世界最高峰であるが故に「宿命」と「呪縛」から逃れることはできないのか――。その50年の歴史から、私たちは初期における挑戦する精神の大切さと多様性の重要性を、絶えず問いかけられていくような気がしてならない。

『日本人とエベレスト』(山と溪谷社編 定価2200円(本体2000円+税))

ANNIVERSARY

高尾の森づくりの会『20年の歩み』を出版

代表 吉川正幸

日本山岳会「高尾の森づくりの会」は2001年1月、自然保護委員会の有志により創設され、以来、八王子市・北高尾の国有林をベースに活動が続けています。当会の20年にわたる活動の軌跡を『20年の歩み』として刊行しましたので、紹介させていただきます。

この記念誌は、20年間に1万8812本の広葉樹の植樹と、様々なプロジェクトを行なってきた会員の汗と知恵の結晶です。多数の会員の寄稿をもとに編集された本

書は、「私と高尾の森づくりの会」編のエッセイ集と「活動記録」編との2つの合本のような構成になっています。

66人の寄稿による「私と高尾の森づくりの会」には、笑顔の思い出とほろ苦い経験が詰まっています。「活動記録」編は、20年間の活動を以下の5つの切り口でまとめています。

①年間活動報告は、年ごとの会の活動の報告です。2001年から植樹祭を続けており、10年の植樹祭には最大の600人を超える方々が参加され、1668本の植樹を行いました。しかし、植栽地が少なくなり16年からは育樹祭に代えました。

06年には、小下沢^{こげさわ}上流にベース小屋を手作りにより建設しました。この小屋を拠点として間伐材を利用した木工工作を行なう「物づくり班」なども結成され、今も会員の拠り所となっています。しかし、19年秋の台風被害により小下沢林道が崩壊してべ



『20年の歩み』書影

ース小屋までの車の乗り入れが不可能になり、以後は会の作業として林道歩行路の確保や登山道の修復を行ないました。

②専門班活動には、動物調査や植物調査の記録があります。北高尾の山中に設置した監視カメラから得られたシカの出没記録やイノシシ、猿、熊に至るまでの映像から、森に棲む動物の生態を明らかにしています。

③プロジェクト活動には、11年の東日本大震災の直後から、会の有志がチェーンソーを持つて駆け付け、16年まで15回の気仙沼復興支援のボランティア活動を続けた記録があります。また、00年の三宅島の火山噴火により失われた植生を復活させるため、08年から三宅島緑化再生の活動を今日に至るまで22回続けています。さらに、11年からラオスに渡航して、森林展示林を造成

するプロジェクトを行なった6年間の記録などがあります。

④啓発活動には、京王電鉄株との共同事業として、「親子森林体験スクール」を現在に至るまで開催していることや、小学校の生徒や専門学校の学生を対象として、森林体験のキャンプやハイキングを行なった記録が残されています。

⑤普及宣伝活動には、会報誌の発行や植樹祭の開催など、森づくりを広めるための活動を報告しています。

*

本年2月には「創立20周年を祝う会」を予定していましたが、新型コロナウイルスの影響で残念ながら中止しました。その会場で配布する予定であった『20年の歩み』を手ご希望の方は、左記までお知らせください。

✉ markinokyo81@gmail.com

「高尾の森づくりの会」を創設のときからご支援いただいた日本山岳会の皆様には、この場を借りてお礼申し上げます。コロナ禍の終わった後には植樹祭の復活を目指しておりますので、ぜひご参加ください。



急斜面での植樹風景(2021年11月7日)

RELOCATION

板橋「植村冒険館」が移転リニューアル

館長 中野義明

このたび板橋「植村冒険館」は加賀の地に移転、リニューアル・オープンしました（最寄り駅は都営地下鉄三田線・板橋区役所前駅）。

冒険館は平成4（1992）年、板橋区蓮根2丁目に開館し、年4回程度企画展示を行ない、植村さんの業績など幅広く紹介してきました。そんななか板橋区は東板橋体育館改築の際、体育館機能と博物館（冒険館）機能を併せた、ほかに類を見ない複合化計画を策定しました。施設名も「植村記念加賀ス



1階にある「ウエムラチャレンジベース」

ポーツセンター」と変更し、体育館機能は昨年9月1日に先行オープン、追って12月18日に冒険館がリニューアル・オープンしたのです。なお、ここ加賀の地は、植村さんがかつてお住まいになっていた旧中山道・仲宿に程近く、付近の公園などでトレーニングを行なった縁の地でもあります。

新植村冒険館の特徴

スポーツセンター3階に冒険館があります。まず入り口を入ると



植村さんの存在が身近に感じられる3階展示室

縦横3mのスクリーンが目に入ります。植村さんの代表的な冒険3編（アマゾン川イカダ下り、エベレスト、北極犬ぞり）各5分程度の映像をご覧いただきます。とりわけエベレスト編は、植村さんが撮影した貴重な映像を見ることができま。また、床面にも広がる圧巻の映像となっていますので、一見の価値があります。

展示室は「常設展示」と「企画展示」があります。「常設展示」のコンセプトは、「今もここ」にいる植村直己です。「ここ（＝冒険館）」にいるかのような存在感を感じてもらうような構成としています。植村さん知らない世代に対して、出会ったような気持ちになるような解説や演出となっています。一方、「企画展示」は一つの冒険に焦点を当てた展示とし、年3回程度展示内容を替える予定です。また、冒険・探検・登山などに関する貴重な図書を集めた「どんぐり文庫」があり、原則室内閲覧ですが、一部貸出しもできます。

1階には「ウエムラチャレンジベース」があります。グリーンランド縦断に使用した「犬ぞり」（実物大／複製）をシンボル展示としてお

り、目の当たりにするとその大きさに迫力を感じます。そのほか冒険・探検の本を自由にお読みいただく「ブックススペース」や植村さんの冒険を写真パネルで紹介する「展示スペース」があり、3階への誘いとなっています。

そのほか2階プール・ギャラリーの壁面を活用して大型写真を展示しています。大型写真だからこそ、迫力や臨場感が伝わってきます。また、1階から3階までを「言葉の回廊」として、階段の壁面延べ9ヶ所に植村さんの著書から引用した「言葉」を紹介しています。

1人でも多くの方に当冒険館を訪れていただき、植村さんの数々の業績や、用意周到な準備、奥様をはじめ関係する全ての人を思いやる心遣いなど人間性にも注目していただければ、と思います。また、植村さん知らない若い世代の方々にもご来館いただけるよう、植村さんの魅力をお伝えしていきたいと思。皆さまのお越しを、植村さんとともに職員一同お待ちしております。

この新しいスポーツ文化基地から、「ウエムラ・スピリット」を発信していきます。

追

OBITUARY

悼



坂口三郎さんを偲ぶ

渡邊雄二

日本山岳会創立120周年記念事業として、「全国山岳古道調査」が始まった。栃木支部でも早速プロジェクトチームを立ち上げ、坂口三郎氏(本支部顧問)をアドバイザーにお願した。快く引き受けてもらい、昨年中の実施調査にも5回のうち3回参加された。

3回目の参加は昨年11月14日、会津西街道・山王峠の古道であった。参勤交代の道であり、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』の道



坂口三郎(さかぐち・さぶろう)
会員番号7973

1926年 福岡県若松市生まれ
1938年 福岡県立小倉中学校(旧制)
1943年 海軍兵学校(広島県江田島、第75期)在校中に終戦を迎える
1948年 宇都宮市で水産卸事業を経営
1965~81年 栃木県山岳連盟理事長
1975年6月 日本山岳会入会
1982~99年 栃木県山岳連盟会長
1995~2001年 日本山岳協会会長
2001年 叙勲(勲四等瑞宝章)
2007年5月 日本山岳会栃木支部設立の発起人に
2021年11月20日 94歳、自宅にて永眠

でもある。この日は秋晴れの気持ち良い一日で、落ち葉を掻き分け、いかにも古道を歩くといった感じであった。氏も一部だけ一緒に歩き、帰りの車の中では、次の調査山城についての情報交換をしながら、楽しそうに帰途についた。よもやこの山行が氏の最後の山行になるなどとは、思いもよらなかった。亡くなる6日前のことであり、亡くなった日は95歳の誕生日を迎える2日前であった。

氏は福岡県生まれ、父親は鹿児島出身で、その後の経歴もまさに九州男児である。海軍兵学校在

校中に終戦を迎えた。そのため旧海軍関係者との交流は濃密なものであった。終戦後、海軍兵学校から一度、父親の出身地である鹿児島に復員し、その後、宇都宮市で水産卸事業の経営に当たった。

宇都宮市に来てからは地元宇都宮山岳会に入会し、趣味の登山を本格的に始めた。75年には、織内信彦氏と原蕃氏の紹介で日本山岳会に入会した。その後、栃木県山岳連盟理事長と会長の重責を背負い、栃木県の健全な登山の発展と登山文化の醸成に寄与した。

95年からは、懇願されて日本山岳協会会長に就任し、組織の改革と発展に尽力した。それまでの会長職は中央の著名な方々が就任したが、氏は最初の地方岳連出身の会長となり、宇都宮、東京間を新幹線で足繫く通った。会長職退任後は多くの岳友と全国の山々を巡り、チベットなどへの海外トレッキングも楽しんだ。氏にとって山登りは人生そのものであり、いつも身近なものであった。

私と坂口氏の付き合いは、私が高校山岳部のときに理事長をされていたので、55年の長きにわたる。この間、私は氏から「雄ちゃん」と

愛称で呼ばれ、公私ともども大変お世話になった。栃木県で開催された国民体育大会山岳競技、全国高校登山大会、県山岳連盟の記念行事などの成功は、氏の尽力によるところが大きい。

日本山岳会の活性化のために支部設立の機運が高まった折、故日下田實氏らと一緒に栃木支部の設立に尽力し、今の栃木支部の礎を築いた。その後、支部山行や行事には特段の用事がない限りはいつも参加した。また、日本山岳会と支部には活動支援のための多額なる寄付をされた。

氏が80代後半のとき、薬師岳にご一緒した。太郎平小屋の五十嶋博文氏の歓迎を受け、古き良き時代の山談議に花が咲いた。就寝時に着衣をきちんと枕元に畳むのは、海軍兵学校時代からの習慣であろう。いつでもどこでも氏から学ぶものが多い。氏の生き方は、私の目標、理想でもある。

自然を愛し、山登りを続け、楽しい酒を嗜み、多くの岳人と交流を深め、生涯現役だった坂口三郎さん、またどこかでご一緒できることを楽しみにしています。合掌

(栃木支部長)

連載■で当地アルプス登山案内5

長瀨アルプス

埼玉支部 宮崎 稔

「長瀨^{ながとろ}アルプス」の誕生は30年くらい前に遡る。

秩父の山岳会の一つに「秩父登山会」があり、会員に長瀨町在住の落合盛光さんがいた。秩父周辺の難壁を攀じ、山岳写真の腕前も相当地な落合さんは、山の友だち10人でグループを結成、全員でヨーロッパ・アルプスへ遠征した。そのときのアルプスの景観がメンバーに深い感動を与え、「秩父にもアルプス！」どうせなら観光地長瀨がいい」ということになった。19



野上峠付近から雑木林越しに見た宝登山

90年ごろの話である。

【コースガイド】

秩父鉄道・野上^{のがみ}駅で下車すると、正面に見える尾根が今日歩くコースである。改札口を出て右側に観光トイレと案内板、宮沢賢治の歌碑がある。

まずは、正面の山に向かって約700m先の「万福寺」を目指す。すぐに信号のある国道140号（秩父往還）にぶつかり横断する。道は右にカーブし、山がぐつと近くなると登山口の万福寺に着く。

案内板を見ながら民家の横から沢沿いに登り、急登して尾根に出る。雑木の尾根道は風が強いことがあるので、装備を飛ばされないように注意したい。雑木の気持ち良い林を行くと道が広くなり、神まわり分岐に到着。広い作業道が左に分岐しているのを見ながら、山の右側を巻く道を行く。10分も歩くと右に登る天狗山分岐がある。宝登山^{ほと}には行けない道なので、余裕のある人は往復してみるのも良

かるう。

やがて道は下り坂になり、正面に小ピークが現われる。巻いても登っても少し先で合流し、腰をおろしたくなるような岩がある水池分岐に到着する。左に下る道は雨裂が進行し、道の中央が深くえぐられているので注意したい。

水池分岐から先は左右にロープが張られ、大穴が現われる。以前「蠟石^{ろうせき}」を鉛筆状に削り、長瀨土産として売っていた原石の採掘跡と聞いている。足元にすべすべした白い石片を見付けられるだろう。野上峠・小鳥峠は廃道になってしまったが、その痕跡を捜すのも一興である。

のんびりした雑木山の先に黒木の宝登山のシルエットが大きく見えるのも、この付近ならではの景観である。尾根通しの緩いアップダウンの道は、やがて右側を巻き奈良沢峠に飛び出す。

緩い登りの舗装林道を約800



m行くと、名物になってしまった「毒キノコ」の看板がある。ここで林道から分かれ足場の悪い急坂を左に登ると、長く急な階段登りの宝登山裏参道が始まる。階段道が終り、岩が出てくると山頂は間近。冬の時期は、蠟梅^{ろうばい}の黄色い花が早春の香りとともに出迎えてくれ、山頂(497m)に到着する。

北側の展望は利かないが、南側には武甲山から奥秩父連峰、両神山の山並みが見渡せる。山頂直下の森に鎮座している宝登山神社奥宮の狼に挨拶したら、蠟梅園の中をケープル山頂駅広場に下る。ケープル駅前の広い遊歩道を右に釜伏山から大霧山の山並みを眺めながら進むと、レストハウスの横に

下山ルートを示す案内板がある。昔のショートカットが、いつしか本道になってしまった道である。今日は直進して表参道を下ろう。

奥宮へ登る階段を過ぎると長瀨町の北面が開け、今日登って来たコースの先に不動山から陣見山（長瀨北アルプス）が遠望できる。

この表参道は至る所にショートカットがあるが、思わぬ危険もあるうし、せつかく登った山なのでゆつくり本道を下ろう。中間付近には東屋があり、休憩できる。ケーブルの索道の下を右に下れば、トイレのある駐車場の一角に出る。桜のシーズンで、時間があれば15



宝登山表参道から見た長瀨北アルプス

分くらいなので道路を横断し、野土山経由で長瀨駅からの参道に出ても良い。

また、ケーブルの索道の下を左に下れば、山麓駅入り口を右に見て宝登山神社本殿の鳥居の前に入る。直進するとロータリーの横にトイレがあり、参道をそのまま下れば長瀨駅まで10分くらいだ。

なお、登山適期は盛夏以外ならいつでも良いが、冬・早春はアイゼン持参のこと。宝登山北側は降雪があると、長期間アイスバーンになる。

【コースタイム】 野上駅(10分) 万福寺(40分) 天狗山分岐(20分) 氷池分岐(25分) 奈良沢峠(40分) 宝登山(45分) 宝登山神社・ケーブル山麓駅下(10分) 長瀨駅(合計3時間10分、9km)

【山行メモ】 * 駐車場は野上駅と、国道を熊谷方面に1000m行つて右折した所と、3000m先の長瀨町役場・長瀨駅周辺に駐車場あり。
* 野上駅は3月12日から、スイカ・パスモの使える無人駅になる予定。

【参考文献】 長瀨町観光協会HP
<https://www.nagatoro.gr.jp/> (長瀨と近郊のハイキングMAPなどの情報が豊富)

連載■ご当地アルプス登山案内⑥ 皆野アルプス

秩父盆地の一角を占める埼玉県皆野町は、秩父音頭発祥の地として知られ、「虫送り」や「獅子舞」などの無形民俗文化財の宝庫であり、俳人・金子兜太の故郷でもある。荒川が町の中心を景勝地・長瀨岩畳へと流れ下り、蓑山と皆野アルプスの盟主である破風山が荒川を挟んで対峙している。「皆野アルプス」には、秩父巡礼札所33番・菊水寺から札立峠を経て札所34番・水潜寺に至る巡礼道を含め、如金峰、国神、高橋沢、桜ヶ谷、風戸など全8コースがある。江戸後期編纂の『新編武蔵風土記稿』（以下『風土記稿』）に、札立峠は三十三番観音札所より三十四番への峠と記され、巡礼道の中でも古くから難所として知られている。今回は天狗山、大前山、破風山を経て前原山に至る主稜縦走コースを紹介する。

【コースガイド】

皆野駅前から皆野町営バス（日野沢線）に乗り、登山口の秩父華厳前バス停で下車する。バス停向

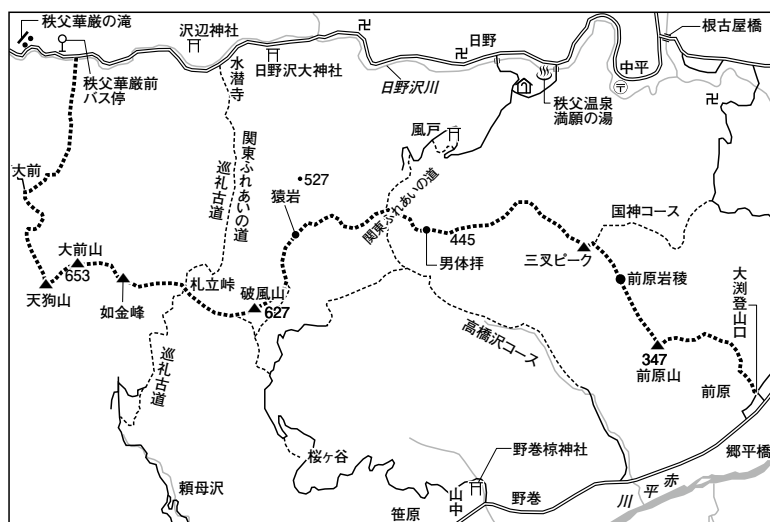


多くの巡礼たちが越えた札立峠

かい側は落差13mの「秩父華厳の滝」で、『風土記稿』に名を遺す名瀑「空瀧」が名称変更されたもので、登山者を含め多くの観光客でにぎわう。

バス停から日野沢川を渡ると標識「皆野アルプス・如金峰コース―破風山」および登山者数調査のカウンターが設置されている。杉林に覆われた薄暗い登山道をジグザグに登り、右手に廃屋を見送ると間もなく桃源郷を思わせる大前地区に出る。数軒の民家が集まっ

埼玉支部 松本敏夫



た上部に「皆野アルプス 如金峰コース」の標識とニリンソウに囲まれて自然石に刻まれた馬頭尊が迎えてくれる。冬から晩春までがお勧め時期である。

分岐を左(大前山方面)に進み、鬱蒼としたヒノキの植林帯の中の標識「破風山(近道)―天狗山・破風山」を右折(天狗山方面)すると尾根に出る。分岐には標識「破風山

―華嚴の滝登山口」や「大前山・天狗山・ニョッキン 皆野ふれあいの里」がある。分岐を左折して木々の間から大前山をチラチラ見ながら尾根に突き当たると、すぐ左の尾根上に祠と天狗山(お天狗様)の標識がある。周囲は木々に覆われて展望は望めない。お天狗様の由来は不明であるが、南西に続く尾根上に小峰山がある。小峰山は古峰山とも考えられ、関東を代表する火伏神で、天狗が信仰の対象とされている古峯神社の関連が推測される。

ロープが付けられたザラザラとした急な下りを過ぎ、立木に渡した注連縄と紙垂を潜ると首が失われた霊神像があり、この先が大前山(653m)の頂である。この周辺はやせ尾根の連続で、鎖とロープが要所に固定されていて登山道の整備は良い。鞍掛山(629m)を過ぎると、民間信仰の金精大明神(または疣神様)として知られる如金峰(ニョッキン様)の特徴あ

る大きな岩塊が目の前に突き出ている。

巡礼道として有名な札立峠は鬱蒼とした樹林の中の鞍部で、札立峠は雨乞いの札を立てたことから命名されたものとされる。破風山の登りにかかる間もなく前方が開け、破風山山頂(627m)である。角柱の一角が無残にも欠けている三等三角点があり、城峯山、蓑山、武甲山、二子山、丸山などの眺望がすばらしい。『風土記稿』には、下日野澤村や野巻村では破風山、久長村では八峰山と記され、屋根の破風、峰の多さなど、麓からの山容が山名の謂であろうと推測されている。

山頂から東に下るとサル横顔を連想させる猿岩に着き、「関東ふれあいの道」が水潜寺から札立峠を越えて風戸へと続いている。風戸入り口と前原山との分岐は「大淵登山口・前原尾根コース」の標識があり、前原山を経て大淵登山口に至るコースは「山靴の道」と名付けられている。

「男体拝」の岩場は宝登山の眺望が開けている。「前原岩稜」の岩場を過ぎると前原山(347m)山頂で、四等三角点が設置されている。

樹林に囲まれた尾根上の明確な登山道を下ると、大淵登山口には「皆野アルプス」の標識と登山者数確認のためのカウンターがある。赤平川を郷平橋で越え、信号を左折して皆野橋で荒川を渡り、皆野駅に戻る。

【コースタイム】皆野駅(バス30分)秩父華嚴前バス停(5分)破風山登山口(1時間)天狗山(55分)札立峠(15分)破風山(1時間10分)三叉ピーク(35分)大淵登山口(20分)皆野駅(合計4時間20分、11km)

【参考文献】皆野町役場産業観光課が作成した「皆野アルプス・破風山登山マップ」



ツツジが彩りを添える春の破風山山頂

Climbing&Medicine・88

春の山でホッとひと息しませんか —地形療法と山歩き—

医療委員会 村上和子

コロナ禍のために「まん延防止等重点措置」は18都道府県で3月21日まで延長という、重苦しい空気の中で春を迎えることとなった。オミクロン株という感染力が強いコロナウイルスのために、春の山へ行くことに後ろめたい気持ちを感じてしまう。しかし、混雑していない交通手段を使い、空気のきれいな、登山者の少ない山に出掛けることは、心身の健康にとって良いことと思う。

ドイツに「気候性地形療法」という予防医学と健康増進のための学問分野がある。「気候性地形療法」とは聞き慣れない言葉かもしれないが、運動前後の心拍数を計測して運動強度をコントロールしたり、体温や乳酸値を測定して運動処方を行なうものだ。主に心臓循環器系のリハビリを目的とし、治療として実施されているとともに、市民の健康づくりに役立てられている。具体的には、医師から処方された運動プログラムで勾配のある場所を歩く。同時に、居住地と異なる気候の土地に触れることで、いつもと別の気候が身体に作用する。野山を歩き、新鮮な空気を吸ってリフレッシュすることが健康維持につながるのだ。こうして心身ともに健康をアップさせるという療法だ。

日本でも地形療法の取り組みをしている自治体がある。たとえば蔵王高原がある上山市(山形県)では、ミュンヘン大学が認定したコースに基づいて健康づくりに取り組んでいる。つまり、「冷氣と

風」、「太陽光線」などの気候要素を活用し、森や山の傾斜地を歩くことで持久力を強化し、運動効果を高めるようにプログラムを組んでいる。

基準は週に3～4回、歩行時間は20～40分で、歩行中「やや冷える」と感じるよう衣服を調整する。細かい数値としては、運動強度は最大酸素摂取量の70%、乳酸値2～4 mmol/l、1分間の心拍数については180-年齢(普段運動してない人は160-年齢)だが、血圧降下剤を服用している人は心拍数を10～20%低くすることなどを定めている。循環器系の疾患や糖尿病の人などは、事前に運動可能かどうかを主治医に確認することになっている。

国内では上山市以外に、所沢市(埼玉県)、小山町(静岡県)、白川村(岐阜県)などで行なわれている。コロナ禍が一段落すればさらに広がっていくと思われる。希望者はそれぞれの自治体に問合せするとよい。

山歩きは、筋肉を使うこと以外にも心身の緊張をほぐす作用がある。特に春は様々な野草が芽吹き始める季節だ。新緑や野草、花々に感動したり、癒しを感じたら、コロナ禍で行動制限されていた緊張がほぐれ、様々なストレスが解消されるだろう。その結果、血流がアップし、脳の機能調整がされ、健康増進につながるだろう。山歩きは地形療法に通じると筆者は考えている。新緑のパワーを受けながら、ホッとひと息してみませんか？



新緑の尾根道でリフレッシュ

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

群馬のヤブ山⑤ 最終回 赤火岳(1822m)

中山達也

・群馬県多野郡上野村／長野県南佐久郡北相木村

・2・5万図Ⅱ浜平

・2005年11月中旬登山

群馬・長野県境に位置する赤火岳は国土地理院地形図に地名が記載されていないが、その名前の響きから比較的良く登られているようだ。

県の南西端の上野村と長野県北相木村の境にあり、地方道124号の県境ぶどう峠の南約2・4km(直線)にある1822m峰が赤火岳である。意味不明だがツギノスとも呼ばれているらしい。

北相木村、相木川沿いの林道を利用する、御座山から尾根伝いに縦走する、あるいはそれらを組み合わせるなど、いくつか登る方法

はあるが、分かりやすいぶどう峠から往復した。峠は数台駐車可。峠名を書いた碑と、お地藏様の覆堂の後ろからヤブに入る。両側から笹や灌木が煩わしいが、踏み跡はしっかり続き、県境を示す営林署の杭も多数あり、迷うことなく進めた。

1654m峰の登りの広い斜面は踏み跡が乱れ、一部不明瞭になる。このピークを越すと稜線は岩稜あり、シャクナゲのトンネルありで変化に富んでくる。何ヶ所か大岩に行く手を阻まれるが、巻道がある。

赤火岳手前の1700m



1671m峰からの赤火岳

峰は一部岩場になり、展望が良い。このコースでは唯一の好展望地だ。赤火岳への登りはヤブの急登で、帰りが少し心配になるほど。最後



山頂の三等三角点

にすっかり汗をかかれ、狭い山頂に飛び出す。真ん中に三等三角点が出し、西側が少しだけ開け御座山が見えた。

この稜線は倒木が多いが、ほぼ踏み跡があり（一部不明瞭）、特にひどいヤブもなかった。春か秋、葉の落ちた時期にお勧めするが、ぶどう峠への地方道124号は冬季閉鎖されるので確認が必要（2021年12月現在、124号の群馬側は路肩崩壊のため通行止め。長野側は冬期規制のみ）。

〔注〕群馬のヤブ山で登山の対象としているのは三省堂出版の『日本山名事典』に記載されている山（地名）だ。したがって国土地理院地形図に山名記載がない山もある。地図は国土地理院地形図をカシミールで切り取って使用している。拡大／縮小してあり、縮尺は正しくない。この記述は登った当時のもので現状は不明だ。ネットなどで最新情報を確認して欲しい。

（群馬支部）

山旅俳句

西山秀夫

【出羽三山の山旅】 10月7日～9日

月山や波立つ秋の日本海
秋冷やバツタ居座る月の山
鳥海山の羽ばたくやうな出羽の秋

冷へし身を芯から温めきのこ汁
【古都の山旅】 10月23日

比叡山どんぐりの実を踏みて行く

行く秋の比叡山にて別れけり
【大日ヶ岳】晩秋の鮎走古道を歩く
11月6日

知られざる樺の黄葉の古道かな
秋晴れや曾遊の山のみならず
秋高し白山雪をつけにけり

（東海支部）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

アルパインフォトクラブ

第28回写真展「心に映る山々」

本来、第28回展は一昨年（2020年）に開催する予定であったが、新型コロナウイルスの急拡大で来場者への感染の恐れのため、また、従来使ってきたポートレートギャラリーが利用できないため、開催を見合わせた。当クラブが写真展を開始以来、初めての中断であった。

幸い秋には第5波も収まってきたので、9月から準備に取り掛かった。候補作品の大半は一昨年の写真展用にとすでに提出されていたが、追加分については例会がで

きなかったため、郵送で集めた。応募作は2年分あったため130点に上った。その中から40点を厳選し、展示作品とした。また、感染対策には細心の注意を払い、受付の飛沫防止シート設置、筆記用具の消毒、体温チェックなどの対策をとった。このほか、万一感染者が出た場合の緊急連絡先として住所や電話番号を記載してもらうシートを用意したが、例年でも芳名帳への記入を拒否される来場者もあり、対応に苦慮した。対策手続

きはマニュアルにし、受付係に周知した。

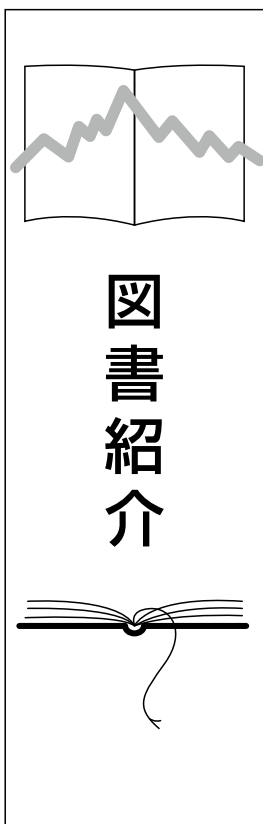
写真展は例年より約1ヶ月遅い、12月2日から8日まで東京都新宿区の下谷ポートレートギャラリーで開催された。師走の繁忙期であり、また、オミクロン株が日本で初めて報告された直後でもあり、来場者が大幅に減るのではないかと心配したが、例年の3分の2であったものの、7日間の会期中400名の入場があった。山岳会やほかの関連写真クラブの会員の方々が多数来ていたようで、会報やホームページなどへの広報で成果があったと思われる。懸念した受付の問題も、習慣化していたためかトラブルもなく対応できた。

なお、作品はこの後、酒田市総合文化センター（6月）や高尾599ミュージアム（10月）で巡回展示される予定であるが、詳細なスケジュールはのちほど案内する予定である。また、今回の写真展を機に、当クラブは「全国山の日協議会」の通信員団体となり、協議会のホームページに年6回「通信員レポート」を掲載することになった。その第1弾として、今回の写真展で展示した作品について撮影者の

解説を載せている。また、次のURLも併せて参照されたい。

<https://www.yamanohi.net/report.php?id=1984>

■2月号(15ページ)に掲載した当会の活動報告は、古い内容の報告



信濃毎日新聞社出版部編

寛保2年の千曲川大洪水

「戌の満水」を歩く



2021年6月
信濃毎日新聞社
B5判 224頁
2200円+税

この本は、2002年に出版され、2019年の台風19号の災害記録を追加して増補改訂版として出された本だ。

私は台風19号のときは、山梨県のロジ山旅に泊まっていた。台風が過ぎて、東京へ帰ろうとした

記事でした。本号(3月号)にて改めて正しい報告文を掲載させていただきます。ご迷惑をお掛けいたしましたことを深くお詫び申し上げます。

(松永秀和)

ら、中央道も甲州街道も土砂崩れで通行止になってしまったのだ。

佐久平へ出て内山峠を越え、下仁田経由で東京へ帰ったのだった。そのとき見た千曲川は赤茶けた川岸とごろごろの石で、以前見た穏やかな感じではなかった。長野の新幹線基地が水没したのを知ったのはその後のことだ。

台風19号で長野市内が洪水となつたのは、千曲川で川幅が狭くなる箇所です。水位が上昇し、堤防を越えて堤防の外側を削る「越水」と呼ばれる現象が起きたことが原因と報道されている。この越水は埼玉県の越辺川でも起きて、

図書受入報告(2022年2月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
山と溪谷社(編)	日本人とエベレスト : 植村直己から栗城史多まで	447p/19cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
W.ブルーイット(著) 岩本正恵(訳)	極北の動物誌(ヤマケイ文庫)	255p/15cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
時枝務	山岳霊場の考古学的研究	278p/22cm	雄山閣	2018	著者寄贈
實川欣伸	富士山に二千回登りました	237p/19cm	双牛舎	2022	著者寄贈
Kirkpatrick, A. / Haroojae Club (Tr.)	1001 Climbing Tips (ハングル版)	276p/25cm	Haroojae Club	2021	発行者寄贈
Thompson, S. / Haroojae Club (Tr.)	Unjustifiable Risk? (ハングル版)	492p/24cm	Haroojae Club	2021	発行者寄贈
McDonald, B. / Haroojae Club (Tr.)	Art of Freedom (ハングル版)	415p/24cm	Haroojae Club	2020	発行者寄贈
McDonald, B. / Haroojae Club (Tr.)	Winter 8000 (ハングル版)	459p/24cm	Haroojae Club	2021	発行者寄贈
McDonald, Bernadette	Winter 8000	266p/24cm	Vertebrate Pub.	2020	購入
Moorehead, C. (Rev. & Ed.)	Kangchenjunga : Doug Scott The Himalayan Giant	273p/24cm	Vertebrate Pub.	2021	購入
Weare, Garry	Kashmir : A Journey through History	336p/25cm	Niyogi Books	2020	購入
Storti, Craig	The Hunt for Mount Everest	301p/24cm	Nicholas Brealey Pub.	2021	購入
Revol, Elisabeth / Berry Natalie (Tr.)	To Live : Fighting for Life on the Killer Mountain	154p/24cm	Vertebrate Pub.	2020	購入
Davidson, Jim	The Next Everest	409p/24cm	St.Martin's Press	2021	購入

川越の洪水を引き起こしている。

この本には、新幹線車両基地前の「善光寺平洪水水位標」を見上げている写真がある。かなり高い、5 mぐらいの位置に「戌の満水」の標がある。19号ではそこまでは達していないが、報道写真を見ると、この水位標の中ほどに洪水による残留物が引っ掛かっていた。

洪水には、こうした川の増水により堤防を越えて洪水になる場合と別に、土石流による被害もある。「戌の満水」のときには、小諸地区ではそれが大きな被害をもたらしたようだ。今でも、土石流で運ばれてきた大きな石がその規模の大きさを知らせている。

堤防を越える洪水や土石流のほかに、山歩きをする私として気になったケースがある。それはもつと上流の小海町で起きた洪水だ。「上畑村は、千曲川の左岸にあつて、上流で大石川が西から合流、下流では中沢川が西から流れ込み、3つの川によつてコの字型に囲まれ、退路を絶たれて、多くの犠牲者を出した。」とある。山では土石流だけでなく、こうした増水もあるのだ。

この本は、山歩きとは直接関係

はない。しかし、洪水被害から学ぶことは、けつして無駄ではないと思った。

(北島洋二)

稲葉 香著

西ネパール・ヒマラヤ最奥の地を歩く ムスタン、ドルポ、フムラへの旅



2022年1月
彩流社
A5判 176頁
2200円＋税

著者は南北朝の歴史に彩られた、大阪府千早赤阪村在住の美容師。東南アジア・インド・ネパール・チベット・アラスカを放浪し、旅の延長で山と人に出会う。

トレッキングの過程で河口慧海師の存在を知る。慧海師もまた自分と同じリウマチを患っていたことを知るに及び、畏敬の念とともに慧海師の足跡をたどる旅に傾倒していく。

慧海師の存在が、ドルポ(トルポ)を中心としてムスタン・フムラに出掛ける原点になった。2003年、

チベット・カイラス巡礼。翌年、西ネパール・ムクチナート巡礼。折しも2004年12月24日、河口慧海の日記発見と慧海研究プロジェクト立ち上げが報じられた。のちに著者がバラサプと呼んで敬愛してやまない大西 保氏(1942～2014年)は、2006年3月、JAC英文誌に「1997～2004年の間のトルポ、西チベットの登山と慧海足跡調査」などを紹介している。研究プロジェクトの地図作成担当である。

2007年、大阪山の会「西北ネパール登山隊(隊長＝大西 保)」に誘われて参加。慧海師の足跡を再調査するという、願ってもない機会となった。2009年、再び大西バラサプ率いる大阪山の会「西北ネパール登山隊」に参加。ムグ地方からシェー・ボクスムド湖へ、ドルポを横断した。

この2度にわたり大西登山隊と行動をとにしたことが、フィードバックとしての基礎を強固なものとし、次のステップ(2012年と2016年、女性だけの登山隊を編成、ドルポ横断)の成功で自信を深める基となった。特に、2016年はドルポ横断も4回目

となり、500 kmを踏破。

2018年、ネパールの最北西部フムラで大西 保バラサプの足跡をたどる単独行(250 km踏破)を成功させ、ドルポ越冬を遂行し得る確信を得た。

2019年11月11日、出国。100日余りにわたる念願の冬のドルポを体験した。

本書を手渡されたその日、比叡山で千日回峰行を満行された大阿闍梨様のお話を伺う機会があった。千日回峰行は7年間掛けて行なわれる。6年目は、1日約60 kmの行程を100日。7年目は200日を巡る。前半の100日間は、京都大廻りと呼ばれ、全行程は84 kmにも及ぶという。阿闍梨様は、「私には不可能ではありません。歩くために歩くのは、辛いでしょ。私は、祈るために歩きます」と仰った。稲葉さんが慧海師の足跡をたどり祈りを捧げる姿は、どこか回峰行者のお姿に重なる。

文章は平易で、人々の暮らしに寄り添う優しさに溢れている。その心配りは、慧海師が10ヶ月滞在していたというツァーラン村で、「慧海師の像に出会う」と描写したくだりにも良く表われている。

ほぼ50%のページ数を充てた写真がすばらしい。腹に響く重低音の音響を表現できないのが惜しまれる。「ティンマル・ゴンパの跡」は、地質学・鉱物学の研究者必見の写真である。ジヨムソンで見られるという横臥褶曲したジュラ紀の石灰岩層だろうか？

スマホが浸透しつつあるというチベット文化圏に生きる人々の、変わらぬ安寧を祈りたい。

(前田栄三)

牧野森太郎著

自分自身を生きるには

森の聖人 ソローとミューアの言葉



2021年5月
産業編集センター
B6変型判 192頁
1600円＋税

本書のタイトルにある「森の聖人」という言葉から何を思い浮かべるだろうか？ 森の中に住んでいたと伝えられている伝説上の人物を思い浮かべる方もいらっしゃるかもしれない。しかし、「森の聖

人」の正体は、1800年代のアメリカに実在したヘンリー・デイヴィッド・ソロー（1817年7月12日～1862年5月6日）と、ジョン・ミューア（1838年4月21日～1914年12月24日）である。このふたりが残した「言葉のかけら」（日本語訳）を丁寧に拾い集めて、21世紀の日本で生きる著者・牧野森太郎氏（1959年）がそこから感じたことを短いエッセイにまとめたものが本書だ。

本文中でも触れられているので詳しい説明は省略するが、ヘンリー・ソローはアメリカ、マサチューセッツ州コンコード生まれ、ジョン・ミューアはスコットランドのダンバーで生まれ、11歳のときにアメリカに渡り、ウィスコンシン州に入植しており、ふたりともアメリカで活躍した人物である。ふたりに共通する点は、自然と共生することを強く望んでおり、それを貫き通したということだろう。

残念ながらヘンリー・ソローの生前に出版された『コンコード川とメリマック川の一週間』と『ウォールデン森の生活』が本格的にアメリカ文学の傑作と認められるのは、死後70年も経った1930年代だ

ったし、ジョン・ミューアはナチュラリストとして当時の国立公園制度に尽力したものの、晩年に取り組んだダム建設反対運動には敗れてしまったことなどから、当時の社会では受け入れられなかった。特にヘンリー・ソローは現代でいう「ニート」のように生涯定職に就くことがなく、「変人」とまで言われたという記述がある。社会の周縁に追いやられていたふたりが書いたものを現代人の視点で見るとき、見直されるべきことが多くあることを著者は指摘している。

著者のエッセイの中には、「糖

尿病」や「コロナ禍」など現代社会で起きている現象に触れた部分もあり、タイムリーな内容になっている点が興味深い。日本の山でも環境保全の問題が注目されている昨今、本書が山を歩く者の環境保全に対する意識につながっていくことを期待する。誌面構成面でも1ページ当たりの文字数が少なく、サイズもコンパクトで、字も大きいこと、ふたりにゆかりのある地の白黒写真が掲載されていることから大変読みやすいので、ぜひ多くの方に手に取っていただきたい一冊である。

(床田真理)



令和3年度第9回(2月度)理事会 議事録

日時 令和4年2月9日(水) 19時
00分

場所 集会所およびオンライン
(Zoom)

【出席者】古野会長、坂井・橋本各

副会長、柏、南久松、萩原
各常務理事、松原・松田・
清水・飯田・久保田・平川・
川瀬・長島各理事、黒川・
佐野各監事

【欠席者】山本副会長

【オブザーバー】節田会報編集人

【協議事項】

- 1・5年後の支部構想について、支部アンケート結果を元に意見交換した。(松田)
- 2・Google Workspace (グループウェア)の導入について検討した。継続審議。(柏)
- 3・「山の日」講演会の企画案(房総の山復興)があった。(松田)
- 4・新支部構想について意見交換した。(坂井)

【報告事項】

- 1・正会員12名、準会員15名の入会を承認した旨、報告があった。(古野)
- 2・寄附金7件の受入報告があった。(南久松)
- 3・令和4年度総会日程と会場の変更について説明があった。(柏)
- 4・全国支部懇談会(神奈川支部10月開催)プレアナウンスの説明があった。(長島)
- 5・1月20日開催の支部連絡会議の報告があった。(柏)
- 6・1月26日開催の評議員懇談会の報告があった。(柏)
- 7・ホームページへの不正攻撃について報告があった。現在は正常に運営されている。(柏)

8・山行委員会の組織改組の提案があったが、継続して委員会活動が続けることになったと説明があった。(長島)

9・国土地理院WGの委員の追加報告があった。(長島)

10・上高地山岳研究所への観光庁からの統計調査の依頼について説明があった。(古野)

11・委員会面談について報告があった。(柏)

12・ルームギャラリー水漏れ工事が完了した旨、報告があった(柏)

13・102号室燻蒸が完了した旨、報告があった。(清水)

14・「山岳」会報「山」『Japanese Alpine News』の在庫として保管する数量について説明があった。(萩原 松田)

15・「山」2月号の発行について報告があった。(節田)

ルーム日誌

2月

- 1日 緑爽会
- 4日 アルピニズムクラブ
- 5日 スケッチクラブ
- 7日 スケッチクラブ
- 8日 図書委員会 フォトクラブ
- 9日 理事会 山想倶楽部 休山会

16日 つくも会

21日 会報編集委員 フォトクラブ

24日 資料映像委員会 学生部

25日 緑爽会 2月来室者 79名

会員異動

物故

戸野 昭(4191) 22・1・26

熊谷松雄(4350) 22・1・31

内藤 修(4832) ご命日不明

斎藤 晋(6180) 22・1・13

菊地俊彦(9276) 22・2・11

轟昌一郎(9633) 22・1・9

宮坂 登(9918) 21・5・5

井上 勇(10324) 22・2・6

青木枝朗(11322) 21・3・3

川畑康雄(12240) 21・12・18

高木莊輔(12920) 22・2・18

退会
加藤恭子 (6636)
大林正彦 (8758) 東九州
勝山康雄 (8772) 埼玉
法政大学山岳部山想会(11276)
佐藤邦雄 (12925) 越後
磯山隆夫 (14037)
秋山典彦 (14941) 神奈川
大貫重子 (15070)
酒井重人 (15297)

寄附金および助成金などの受入報告(2月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、そのほか
高木 基揚 会員	100	岐阜支部50周年記念 行事寄附金
平田 大六 会員	21	『越後山岳』発行資金 援助寄附金

谷 勝成 (15658)
米谷真由美(15995) 富山
鬼頭幸子 (16316) 東海
渡邊敏雄 (16631) 福島
増田三男 (A0131) 広島
櫻井範子 (A0170) 東京多摩
横山 裕 (A0194)
高橋恵美子(A0205) 埼玉
高森理紗子(A0304)
中村美春 (A0328) 東京多摩
上田留美子(A0329) 東京多摩
武田達弥 (A0359)

INFORM

インフォメーション

ATTENTION

◆「上高地現地講座」のご案内 山の自然学研究会／山の自然学クラブ

上高地の最も美しい6月に、東北学院大学准教授で山の自然観察インストラクターの目代邦康先生をお迎えし、上高地の自然を学ぶための「上高地現地講座」を計画しました。時宜にかなった講座ですので、会員以外の方にもぜひご参加いただきたく、ご案内いたします。当講座を夏の上高地インタープリターに役立てることも念頭に考えています。

日程 6月11日(土)～13日(月)〔2泊3日〕

11日 13時に上高地ビジターセンター集合後、田代池方面 12日 明神・徳沢方面 13日 岳沢方面／14時ごろに上高地にて解散
宿泊場所 上高地公園活動ステーションを予定

主催

日本山岳会・山の自然学研究会／特定非営利活動法人・山の自然学クラブ

協力

講師

ちきゅう研
東北学院大学准教授、山の自然観察インストラクター・目代邦康先生

参加費

3000円(上高地までの交通費、宿泊費などは各自ご負担ください)

*申込み・問合せ先は山の自然学研究会代表 源原重行
携帯090-255487056

参加状況が確定していませんので、状況によっては計画に変更が生じることも考えられます。それらについては追って随時ご連絡を差し上げます。

◆宇田川哲夫写真展
ネパールヒマラヤの高峰と山の子供たち

後援 山と溪谷社

ネパールヒマラヤの高峰と山の子供たち



宇田川哲夫写真展
2022.3.25(金)～31(木) 富士フォトギャラリー銀座
10:30～19:00 土日 11:00～17:00 最終日 14:00
後援 株式会社 山と溪谷社



日時 3月25日(金)～31日(木) 10時
30分～19時 土日は11時～17時 最終日は14時まで
場所 富士フォトギャラリー銀座
TEL 03-353389822
中央区銀座1-2-4 サ
クセス銀座ファーストビル
4F

後援 山と溪谷社

◆編集後記◆

●先月下旬は、昨年の連載記事「島の山旅への誘い」に文字どおり誘われて、瀬戸内西部の安芸群島の山を歩きました。倉橋島・火山を手始めに江田島・古鷹山、宮島・弥山に登りましたが、余寒があったものの連日快晴に恵まれ、島の山ならではの解放感と多島美や海の幸を満喫してきました。

●江田島の古鷹山は、かつて「軍神」と称えられた廣瀬武夫中佐が100回以上登ったという逸話が残る山。我々が登った日も、海上自衛隊第一術科学校(旧海軍兵学校)の幹部候補生数十人が登って来て、山頂で「同期の桜」を歌っていました。元氣瀟刺、頼もしい限りですが、同じ地球上のはるか西方で戦争が始まっているかと思うと、複雑な心境でした。(節田重節)

日本山岳会報 山 922号

2022年(令和4年)3月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社